

中世の計画都市「寺内町」

その発生・展開と歴史的意義について

(株)ジェクト 山村 賢治 (建築史学会員)

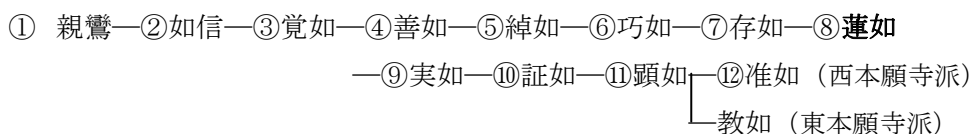
1. はじめに

15世紀初頭から17世紀初頭にかけて、北陸、近畿、東海地方一帯に「寺内町」と呼ばれる都市群が、さまざまな歴史的背景や地域的・社会的状況のなかで発生し展開した。主に浄土真宗系の寺院を中核にした宗教都市であるが、明確な意図をもって計画されたまちづくりと経済活動は、同時代に各地につくられた城下町との比較において、また戦国大名や対立宗派との抗争のなかでの盛衰の過程は興味あるものであり、その経緯と歴史的意義について考えてみたい。

2. 蓮如 京都から近江へ

親鸞(1173～1262)を開祖とする浄土真宗は、長らく低迷の状態を続けていたが、第8世蓮如(1415～99)の時代になって活動が活発になる。蓮如は、長男ではあるが庶子であったため、7世存如が没した後の後継問題で嫡男と争ったが、叔父の如乗らの強引な支持によって法灯を継ぐことになった。43歳の時であった。

(本願寺系譜)



蓮如の代になって、全国各地に広範な門徒を確保しつつあった本願寺の発展は、山門(比叡山延暦寺)にとっては目に余るものになっていた。寛正6年(1465)山門の衆徒は、祇園社の犬神人と合流して、東山大谷本願寺の坊舎を襲い破却した。この時「生身御影」を奉じ、難をのがれた蓮如がもっとも頼りにしたのは、堅田法住、金森道西、赤ノ井慶乗ら近江門徒衆であった。しかし、叡山に近い近江の状況は決して平穏なものではなく、山門との対立と衝突は激しいものとなっていった。大谷破却後も湖東の赤野井庄、金森、などで大規模な合戦がおこなわれるようになったが、事件の拡大を望まない蓮如は、山門に対し金品を納めて和を講ずることにした(文明元年・1466)。以来蓮如は文明3年(1471)吉崎下向まで、金森、湖西の堅田などを拠点として活動を続ける。湖東、湖西での布教活動を通じて、蓮如は近江門徒衆を再び把握することができ、成長する村や町での生活は、その後の布教や寺内町建設のための貴重な経験になったにちがいない。蓮如は失われた本願寺再興の基盤をこの地で模索するが、山門延暦寺に近い近江で教団を発展させるには、あまりに苦難が多すぎた。文明3年、蓮如は近江での布教活動に見切りを付け、北陸に新天地を求めて旅立って行く。

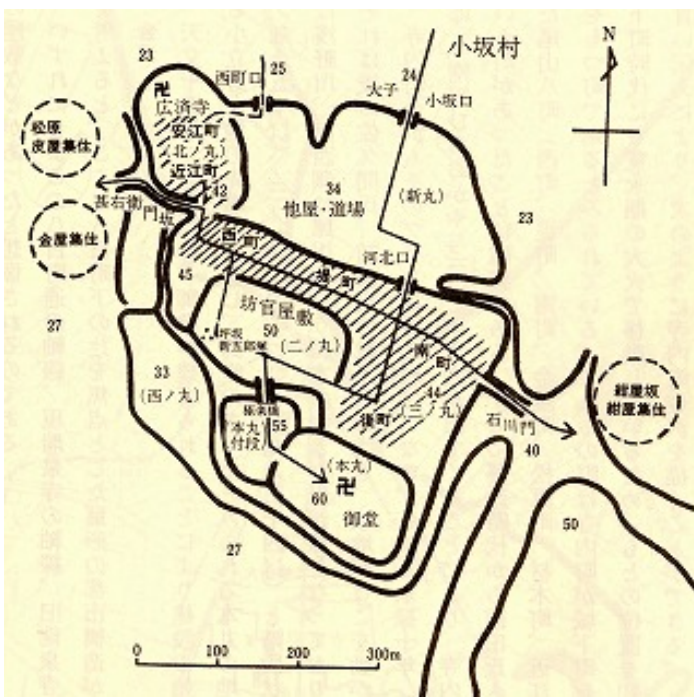
3. 最初の寺内町・吉崎

北陸の地は今でも真宗王国といわれるように、浄土真宗がきわめて盛んであり、それが北陸の県民性にまで強い影響を与えているという。この地への真宗の進展は14世紀からであるが、爆発的に広まるのは蓮如が戦乱の京都、近江からのがれて、北陸吉崎の地に移った文明

3年（1471）以後のことであった。吉崎は越前と加賀の国境に位置し（現福井県あわら市）、南に山、西南から西へ北潟湖があり、北の日本海に続いて交通の要地であり、景勝の地でもあった。吉崎進出からわずか数年のうちに蓮如の積極的な布教活動により、北陸の地は急速に本願寺派に塗りかためられていく。蓮如は村ごとに講をつくり道場を建てさせ、講を集めて組とし、道場を集めて末寺とするように、農民の組織化をはかっていく。生産性の向上により力を蓄えつつあった農民にとって、道場は信仰の場であると同時に寄合の場であり、村の自治の場となっていくのである。こうゆう組織化の手法を確立したのがまさに蓮如であった。こうして、吉崎には宗教的な中心として多数の門徒が集まり、大いに繁栄した。蓮如自身も宗教的連帯感による精神共同体ともいうべき寺内町を建設しえた喜びを「さてこれもは所領所帯にてもかくのごとくはならざりけり、その謂はひたすら仏法不思議の威力なりしゆへなり」（帖外御文章 28）と自負している。



吉崎御坊古図



金沢寺内町構成図

吉崎の寺内町は、本坊と多様な多屋とからなっていた。多屋には坊主が本山守護のために吉崎の山上に築いた多屋と、近辺の門徒が建てた他屋があったと考えられる。また、町の構成は南北の大道を通して、その両端に南大門、北大門を置き、各地の門徒の他屋が百～二百棟もいらかを並べ、加賀、越中、越前の三カ国で、これほど繁栄している町はないという状態となった。このような本願寺教団のめざましい発展ぶりは越前、加賀の守護、山門の末寺平泉寺、豊原寺などの反一向宗勢力を刺激し、力による圧迫が加えられるようになる。これに対し蓮如は真の求道者以外の参集を禁じたが、外周の圧迫と門徒の衝突は避けられなかった。吉崎はその建設当初から反一向宗勢力によってつねに危機的状況に置かれていた。そして多屋衆が寺内町防衛のための有力な戦力であったことは疑いない。多屋衆の詰所としての多屋は、平時には参詣する門徒たちの宿泊所であっても、危機に際しては寺内町防衛の屯所であり、その兵站基地としての機能も果たしたのであろう。多屋衆のほとんどは生活の本拠

を各々その地方に置き、吉崎には寺内町の防衛のために参加した門徒であり、これらの多屋衆こそが吉崎の寺内町を構成する主要なメンバーであった。したがって吉崎では御坊を中心に主として門徒農民からなる多屋衆によって、臨戦的軍団都市としても十分に機能していた。吉崎には坊主衆や他屋衆が集まり、武装を固め、御山と呼ばれた吉崎御坊を中心に寺内町を形成した。宗主であった蓮如は、守護大名との直接的な対決は極力避けようとするが、その争いの渦のなかで、守護富樫政親の吉崎攻撃を前にして、文明7年（1475）吉崎からの退去を余儀なくされた。終始、暴発を抑えてきた蓮如がいなくなると、北陸の門徒は急速に一揆への傾斜を深めていく。蓮如が去った後、焼き討ちされた吉崎から有力な坊主や武士門徒は越中に逃れ、瑞泉寺などを頼った。政親は福光城主石黒光義に依頼して瑞泉寺を討伐しようとしたが、文明13年（1481）越中の一向門徒は石黒氏と対決し、田屋川原の戦いで完全に勝利し、砺波平野は門徒が支配するに至るのである。

4．北陸の三寺内町 井波、金沢、城端

戦後砺波平野の井波（現石川県南砺市）は城塞化され、現在も瑞泉寺の東南にその跡が残っており、200×150mほどの大きさで、高さ5mほどの土塁に囲まれ、外側に濠が掘られていた。以後瑞泉寺、勝興寺を中心とした越中の門徒は、越後の上杉氏の勢力と厳しく対峙しながらこの地を領有した。城塞化された瑞泉寺を中心とした寺内町井波には多くの人が集まり、町家が三千軒あったという。

一方加賀の門徒は、長享2年（1488）高尾山に富樫政親を包囲して滅ぼした。この時の門徒は加賀一国のみでなく、越中、能登、越前にも檄を飛ばし、一揆軍は20万に達したという。以後およそ百年間、加賀の地は守護大名のいない「百姓の持ちたる国」となり、蓮如の三人の息子が住持となっている加州三カ寺を中心とする大坊主と土豪門徒との集団指導体制の下に置かれることになる。しかしながら、幾度かの内乱分裂の後にこのような勢力は指導権を失い、かわって本願寺直接の支配力が強まっていき、北國の総本寺として天文15年

（1546）金沢御堂を建立し、金沢はその寺内町としてここに誕生する。寺内町金沢の詳細な都市計画を知る資料は残されていないが、都市構成の概略は西町、堤町、南町、後町などを主要町人町とし、金屋（金屋町）、皮屋（松原町）、紺屋（紺屋坂）等の職人がその近辺に集住いたことが他の関連文献資料から考えられる。天正8年（1580）佐久間盛政に敗れた後、寺内町の町人町は城下町化にともなって城下に移され、尾山八町として再編成され、城下町の主要町人町とされた。

城端（南砺市）は金沢ほど大規模な広さは持たないが、善徳寺を横に置き、中心をなす二筋の東町と西町がそれぞれ上町と下町に分かれ、下の出丸町、上の大工町が一筋という単純明快な都市構造である。このような町割の形態や出丸町、大工町などという町名は明らかに城下町的である。城端は天正9年（1581）、越中における一向一揆の全面的敗北に際しても、善徳寺とともに無傷のまま生き残り、後に越中の支配者になった前田氏にも保護され、絹織物の町として発展してゆく。また合掌造りで有名な五箇山への交通の起点でもあり山間への物資の中継基地であった。

北陸の三寺内町は、井波が瑞泉寺という寺が一向一揆の高まりの中で寺内町化していった「プレ寺内町」であり、金沢は本願寺が加賀に直接指導権を確立するための北国総本寺とし

て御堂を建て町を作った「代表的寺内町」である。さらに城端は土豪の城館であった地に16世紀後半善徳寺が招聘されてできた「ポスト寺内町」と考えることができる。

3．山科 本願寺再興と本格的寺内町建設

吉崎を退去した蓮如は、若狭小浜から丹波を経て河内に至り、出口（現枚方市）に御坊を建ててそこを拠点として摂津・河内・大和などへの布教を進めていたが、文明9年（1477）金森の道西から本願寺再興の適地として山科の地を勧められ、交通の要地でもあるこの地に居を移し、本格的な寺内町の建設に取り組むこととなった。

蓮如の選んだ山科郷野村の地は、北に洛中から東海・北陸へと続く三条街道、東に奈良へぬける大和街道、西に洛中五条へぬける渋谷街道のはしる交通の要地であった。すでに本願寺教団は大谷時代と比較にならぬほど強大化しており、本山は宗教的連帯を求めて集まる多勢の道俗男女を受け入れるためには、本山が交通の要地にあることは必須の条件であった。

文明10年（1478）に始まった山科寺内町建設は、翌11年になると本格化し、12年には御影堂が完成して三井寺に預けてあった根本の御影を迎え、大谷破却以来15年ぶりに本願寺の再興がなった。その後も阿弥陀堂や大門の建立と併行して寺内町の周囲には「構えの堀」（戦火からの防衛施設）の構築も進んだ。古図によると、山科寺内町が御本寺（第一郭）、内寺内（第二郭）、外寺内（第三郭）及び南出丸からなっている。屏風のように折れ曲がる土居や堀で幾重にも取り囲まれ、要所ごとに出入隅や入隅を設けた様は、まさに「戦国の法城」と呼ぶにふさわしい構成を示しており、この寺内町の縄張りは近世の平城と比して決して遜色のないものである。戦国の世の城がまだ山上にあった時代に、やがて迎える都市経営に有利な平城の時代を先取りした形で出現した山科寺内町は、蓮如の都市建設者としての慧眼を如実に現している。

第一郭御本寺には、御影堂。阿弥陀堂・寝殿など山科本願寺の主要施設が、第二郭内寺内には、一家一族や坊官の屋敷と興正寺などの坊舎、参詣者のための宿泊施設であった多屋などが建っていたと考えられる。第三郭外寺内に寺内町が形成され、「八町の町」と呼ばれていた。この八町の町には、絵師や餅、塩、酒、魚などの売買にあたる者がいた。

文明12年（1480）11月に三井寺に預けてあった根本御影を完成したばかりの御影堂に迎え、大谷破却以来15年ぶりに再興なった本願寺を中心に山科寺内町は殷賑を極めた。御影遷座直後には日野富子が、永正元年（1504）には足利義澄までが本願寺を訪れている。東山を越えた山科の地で本願寺を中心に建設された寺内町の都市生活は、応仁・文明の大乱で荒廃した洛中に身を置く貴族には、あたかも仏国のように映じたことであろう。（宗祖親鸞が日野一族の出であったことから、将軍義政の夫人であった日野富子が親しく訪問したものと思われる。）しかし、こうした繁栄も長くは続かなかった。領国支配の確立をめざす戦国大名と、宗教勢力から世俗勢力に変化し、領国の一元支配をめざす門徒が武力衝突を引き起こすのは時間の問題であった。蓮如の法灯を継いだ実如も、世俗の権力を敵にまわさぬようと遺言し、もしこの掟が守られねば「この霊場忽ち馬の蹄にかかるべし」とさとした。この実如の言葉は実如の死後まもなく現実のものとなった。本願寺と不和になった細川晴元や晴元に与する近江の六角定頼と、日蓮宗徒の大軍が山科寺内町を包囲したのは、天文元年（1532）8月23日のことであった。翌24日の午前中には南殿が炎上し、午後には寺内町の排水溝口

から攻め入られて、あっけなく炎上、焼滅し、50年余りの歴史を閉じた。

4．石山 最大規模の寺内町

明応5年(1496)蓮如は摂津国生玉庄大坂に寺地を定め、坊舎の工事に着工している。これが後の石山本願寺であり、ここを中心に建設された寺内町はまた近世大坂の源流になった。

石山本願寺は上町台地の高地に建設され、そこは古代以来荒蕪地として見捨てられていたが、摂津・河内両国の国境に近く、守護勢力の及びにくい場所であったと考えられる。しかし蓮如は寺内町建設にあたって、守護勢力の干渉を避けやすい場所のみに注目したわけではない。その土地の要害性、交通の要地、山下に広がる平野、商業集積がすでにあり貿易の拠点ともなる要津の存在、おそらくこれらすべてを蓮如が把握していたに違いない。また不毛の荒蕪地を居住可能にしたのは、門徒集団のもつ進んだ土木技術・治水技術がその背景にあったからにはほかならない。天文元年(1532)山科本願寺の炎上によって、証如は難を石山に避け、やがて本願寺をここに移して本格的な修築工事にとりかかった。石山は天文年間から寺内町の城塞化工事が進められ、外城の構築とともに、本願寺を中核に環濠城塞都市として、その自衛的機能を充実させていった。

方五～七町の町域であったと推定される石山本願寺寺内町は、御坊を中心に六町(北町屋、北町、西町、南町、新屋敷、清水町)で構成されていた。そのうち渡辺津に近く寺内之浦をかかえて淀川・瀬戸内につながる北町・北町屋、中河内方面への街道との接点に位置していた南町、四天王寺・堺へ続く清水町、北東部から京都方面へ連絡する新屋敷など、それぞれが接続する外部との関係で、時代とともに発展していったものと思われる。

石山本願寺が都市としての発展とともに、寺内町において領主的地位を確立し、検断権の行使や年貢・地子の収納権をもつに至り、その力を強めれば強めるほど戦国の武将との衝突は免れなかった。元亀元年(1570)から10年間にわたる石山合戦では、天下布武を呼号する織田信長軍に対して、本願寺に加担する反織田勢力を巻き込んで、陸海で大規模な戦いが続けられたが、天正8年(1580)朝廷の調停もあって、同年7月を期限として本願寺明け渡しの和議が成立し、顕如は石山を退き紀州鷺森に退出した。この和議に鉄砲衆で知られる雑賀門徒は異議を申し立て、大坂城中の講和不服分子も加わり、さらに顕如の子教如もこれに加担した。教如は諸国の門徒に檄を飛ばし、再び石山と周辺の端城に拠って信長に対抗しようとしたが、結局教如も和を請うて信長に降った。そして自ら火を放って、蓮如以来85年の寺内町は全て壊滅する。こうして大坂石山寺内町は仏法と王法の争いの中でその運命を閉じることになったのである。しかし、信長方との講和条件には、本願寺が大坂の地を離れても町民は残ることができるというあり、大坂が全焼したため実現はしなかったものの、本願寺なしでも大坂に残ろうとする町民の意志に、寺内町の枠をこえて成長し始めた近世大坂町民の姿を見ることができる。

5．石山以後 秀吉のまちづくり

石山合戦を和議で制した信長もまもなく倒れ、天下の主になった秀吉の主導で新しい大坂まちづくりが始まる。秀吉は当初都を大坂天満に移し、経済発展のためにも地理的条件の優れた大坂を新首都とした構想をたてるが、朝廷の根強い反対で挫折し、一旦は紀州鷺森に退いていた本願寺を天満へ呼び戻し、再び門徒の経済活動にたよるまちづくり計画をもくろむ。

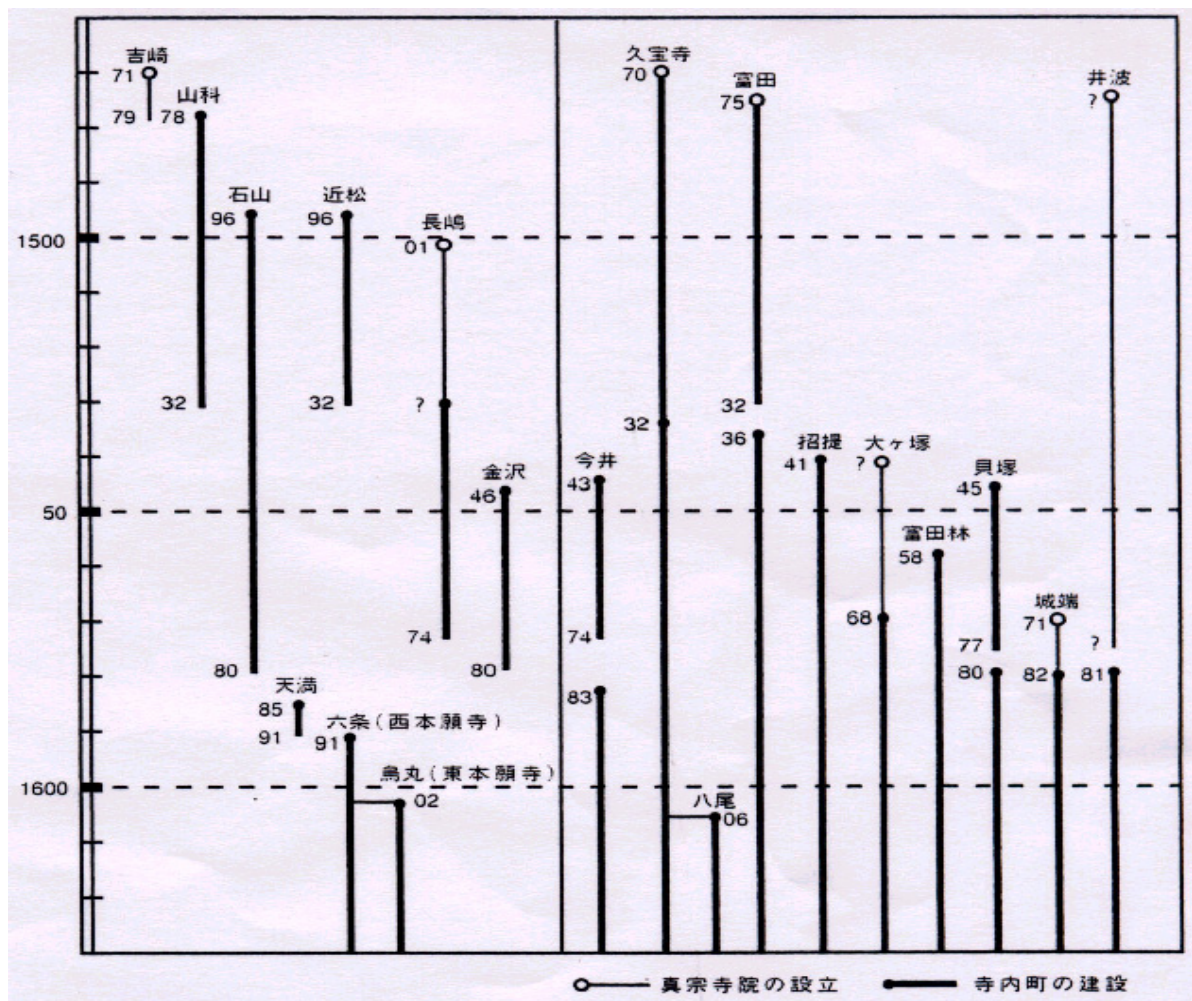
一方、聚楽第を建て名実ともに京都を首都として再整備する方針のもと、南部の八条に広大な寺地を与え本願寺の本拠をここに据えるよう要求する。これが今日の西本願寺である。

その後、二度の大坂の陣によって豊臣家を滅亡に追いやった徳川家は、豊臣色を抹殺しようとする。その一環として本願寺対策は、京都東山の豊臣家廟所と西本願寺の中間に東本願寺を建てさせ、そこには教如を宗主に据えて、顕如の西本願寺との地理的・心理的分断をはかる。蓮如に始まる本願寺門徒による寺内町は、政治権力に左右されるようになって自主性を失い、ここにその歴史的使命は終わった。

6. 各地の寺内町

(本願寺主導による建設)

(在地門徒・土豪による建設)

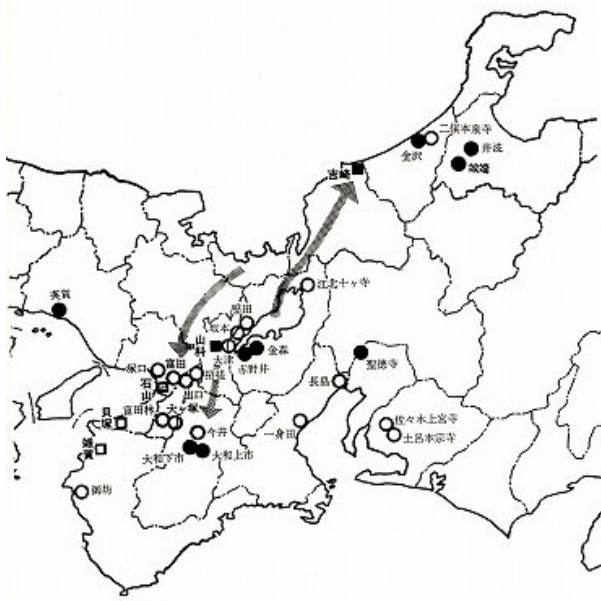


寺内町は山科、石山のほかにもさまざまな場所に建設された。大津顕証寺、伊勢長島、大和今井、河内久宝寺、同富田林、同八尾、和泉貝塚、加賀金沢、近江山田、同鈎寺内、越中井波、同城端、同古国府、尾張富田などが知られる。これらはいずれも主として交通の要地に建設されていた。寺内町に生成には本願寺主導のものと、在地の土豪などがまちづくりを行い本願寺系寺院を招くなど、場所により成立の事情が異なり、またその後の発展にも差異がある。たとえば、「貝塚」は、ト半斎了珍の願泉寺を中核にして構成された寺内町であるが、

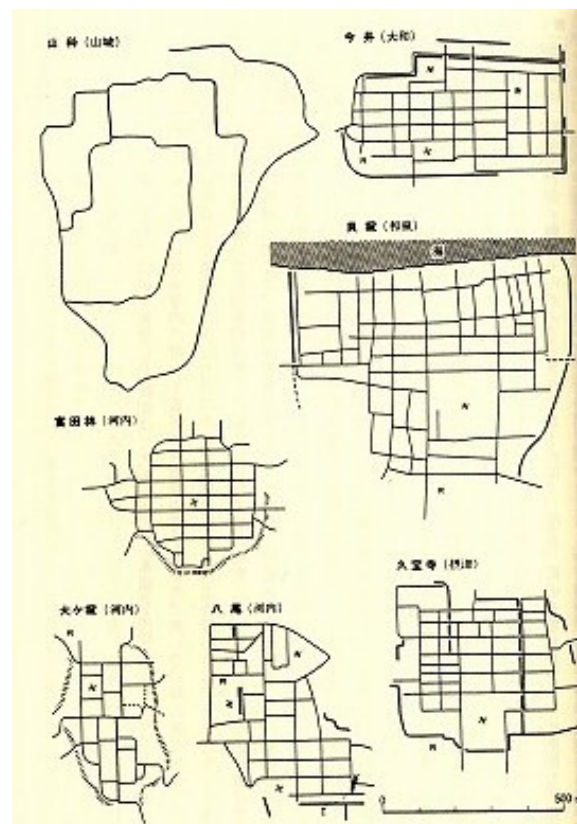
石山合戦の際には毛利氏より本願寺に送られてくる兵糧米がここに陸揚げされたように、港町の機能を持っていた。「大和今井」は、南大和の要地で吉野地方と大坂、堺を結ぶ街道のほぼ中間にあり、大坂枚方宿からも1日行程の距離の所に、称念寺を中核に構成された寺内町であり、これは他の寺内町にも共通することであり、すべて交通の要衝、商業活動に便利な地点が選ばれていた。

「河内久宝寺」は、蓮如がこの地の土豪安井氏の協力を得てその基礎をつくったもので、顕証寺を中核に基盤目状の街路によって構成された寺内町の景観をよく示している。この久宝寺は石山戦争の際に安井方が信長方に通じたことから、本願寺側の攻撃を受けて陥落している。のち安井一族は秀吉の大坂城修築に村民を率いて奉仕し、その功によって城南の地を与えられた。さらに安井道頓は木津川から水路を開く工事に久宝寺村の村民を率いて当たった。これがいわゆる道頓掘川である。これは寺内町がもっていた土木建設技術として注目すべきことである。

「富田林」は、永禄年間に興正寺の証秀上人による開基とされ、当時の領主から百貫文で買得された荒地に寺内町が建設され、周辺の四か村の有力農民「八人衆」によって構築された。寺内町開設以後、信長と本願寺との戦いの時代にあつて、一向宗の御坊として厳しい状況にあつたと思われるが、富田林寺内町は全く無防備で、ひたすら平和政策をとりつづけ、本願寺の誘いにのらないことで信長から安堵され、しばしば兵火が近辺に及びながら戦火に見舞われることなく、平和な商業都市として近世の繁栄の基礎を築くことができた。



寺内町の分布状況



各寺内町の区画割パターン



今井寺内町の現況（奈良県今井町）

7．寺内町の歴史的意義

寺内町は、浄土真宗寺院の境内地として成立した都市であり、そのため他宗寺院の建設は遅れるなどの状況はあったが、必ずしも一宗派による宗教都市として存在したのではなく、さまざまな信仰を持つ人々が、地域の中心都市に自己の生活の場を求めて、近隣からの住民が集まって成立したのであった。このことは寺内町が門徒集団の同行意識に支えられた生活共同体としての純粋さから、商工都市としての経済力と人口の集中をめざし、やがては近在の商人を中心とする商品流通の場、在郷町としての性格を強めながら大きく変容をとげていく結果となったのである。建設技術については、山科での道路建設、石山での松田三郎入道による「城づくり」、久宝寺の安井一族の築造・土木技術などにみられるように多数の技術者の確保という面もあり、この技術者・職人を確保する政策は戦国武将の間にもみられ、後の城下町の形成に継承されていく。近世城下町がたてまえとしては軍事的都市でありながら、実際はほとんど攻防の場となることはなく、むしろ身分格式のみの擬制的軍事都市であったのに対し、寺内町は軍事的防御機能を十分に備えた都市であり、石山戦争に際しては宗教的連帯感によって各地の門徒が呼応して「百姓ノ持チタル城」に拠って戦闘に参加している状況は、強大な都市連合とみることもできる。宗教的連帯感によって支えられた運命共同体として、自衛の精神とともに深い人間的共感によって、平和な都市生活が戦国の乱世に豊かに展開していたことは注目に値することである。都市の環境に人間的なあたたかさや心の潤いが求められている現在において、寺内町の歴史が語るその建設の道程と運営のあり方から、我々は貴重な教訓を学びとらなければならない。

（参考文献）

寺内町の研究 1～3巻 峰岸純夫 脇田 修監修（法蔵館）

日本都市史研究 西川幸治著（日本放送出版協会）

日本近世都市史の研究 脇田 修著（東京大学出版会）

寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内町を中心として— 櫻井 敏雄著

富田林寺内町 歴史的町並み保存計画調査報告書 富田林市編

貝塚寺内町 町並み調査報告書 貝塚市教育委員会編